

【生き返った若者】

▼この箇所です。過去2回説教しています。その時に思いました。何でこの箇所なのだろう。特に2回目の時には、腕組みして考え込んでしまいました。1回は、出来事の物珍しさもあって、聞いて貰えるかも知れない。しかし、2回目は、どうだろう。多くの人は、この出来事に何の関心も覚えないのではないだろうか。

それが、今回は3回目です。

聖書日課を編む人は、一体どんなつもりなのだろうと、思わざるを得ません。

実は、その委員の方々を知っています。どなたも立派な牧師です。しかし、今度あったら、一寸疑問符を付けたい気持ちです。レッド・カードではないにしても、イエロー・カードは付けたい気持ちです。

▼そんなことを考えながら日が過ぎ、繰り返し読む内に、思うことがありました。何事もそうですが、事柄・事件は、先ず何よりも、何時、何処で起こったか、これが大事です。何が起こったかの次に、場合によっては、何が起こったかよりも、何時、何処で起こったか、これが大事です。

新聞や雑誌の見出しを連想してみてください。

「殺人事件」そんな見出しはありません。「高校生殺人事件」これならろうじて見出しになりますでしょう。しかし、それよりも、『学校の殺人』、『白昼の殺人』この方が、見出しになります。この二つは実際に小説の題名として存在します。

つい先日の事件は、『新幹線車中の焼身自殺』、もっと短く『新幹線車中で！』これで充分です。

▼今日の箇所、事件でしょうか、事故と呼ぶべきでしょうか。

それは、礼拝の最中に起きました。今で言えば教会の中で、起こりました。

このことは、他のどんなことよりも大事ではないでしょうか。

何があったか、その詳細は、背景は、と言うよりも、礼拝の最中に起きたこと、教会の中で起きたこと、これが決定的に重要なことです。

▼思い出しても辛い話ですが、もう20年にもなります。かつて親しくしていた青年が、突然亡くなりました。私が最初の任地に赴任した時に、小学6年生だった彼が、妹と二人ついて来た程の親しさでした。

その兄の方が、20代半ばの若さだったのですが、突然亡くなりました。こういう時には、急性心不全ということになりますが、突然死です。それが、クリスマス・イブの晩だったので。イブ礼拝、キャロリングに出た後、小さい公園のブランコに乗ったまま、こときれていたそうです。

その時点では疎遠になっていましたので、その自分の彼の生活、仕事、詳しいことは何も知りません。

しかし、家族にとって、熱心で敬虔なクリスチャンの両親にとって、どんなに辛い出来事だったか。想像を超えるものがあります。

▼私がそのことを知ったのは、何年も経ってからです。その事が起こった時には、何時ものクリスマス・カードも受け取っていた筈です。彼の父親は、クリスマス・カード作りの名人でした。私のカード作りの先生です。

それ以来、クリスマス・カードも途絶えました。しかし、疎遠になっていた私は、その事実さえ気が付きませんでした。

知ったのは2年も後のことです。

▼その母親が、今年、不意に訪ねて来て、玉川教会の礼拝に出席しました。何でも自分が不治の病だそうで、今の内に会っておきたい人を訪ねているのだということでした。礼拝後の僅かな時間お話しただけで帰りました。

多分、自分が会いたい人と言うよりも、亡くなった息子を知っている人、本当に親しくした人という意味合いでしょう。

彼が、キリスト教出版の会社に勤めていたということは、この母親と話したよりも、もっと後で偶然知りました。

▼礼拝の最中に、教会の中で、一人の若者が転落死しました。転落死は兎も角、礼拝中に亡くなることはあり得ないことではありません。そんな時に、教会員は、これをどう受け止めるでしょうか。遺族はどうでしょうか。躓きにならないでしょうか。

畳の上で死ぬたらと昔は言ったものです。それが穏やかな尋常な死に方、真面目に正直に人生を送れば、そういう死を迎えることが出来ると考えられていました。

逆に侍は、戦場（いくさば）での死こそが、本望です。それ以外の所では死にたくないと思え考えました。

▼私の郷里の秋田、特に雪深い横手の街では、春に人が亡くなると、それだけで功德だと言われます。雪国での冬の葬儀は大変ですから、雪が融けるのを待って亡くなるのは、功德だと言うのです。何時何処では、時として如何によりも大事なこととなります。

▼さて、なかなか肝心な聖書に入りませんが、もう少し、これは助走のようなものですので、おつきあい下さい。

アンデルセンに、『幸福のペール』という短い話があります。翻訳によっては、『幸運のペール』となっています。

紹介したいことは、一つだけです。演劇を志したペールが、やっとその思いを果たした主役舞台の幕が下りた瞬間に、息絶えたという話です。

アンデルセンは、これを至上の幸福と考え、描いているのです。このような考え方は、アンデルセンの作品に頻出します。

舞台の上で、絶頂の時に死を迎える、そうかも知れません。しかし、折角それだけのことを体験したのなら、余韻を楽しみたい気もします。それこそ、一生掛けて、じっくりと。

▼7節。

『週の初めの日、わたしたちがパンを裂くために集まっていると、
パウロは翌日出発する予定で人々に話をしたが、
その話は夜中まで続いた。』

何時から始めたかは記されていませんが、まあ、休まず続いたのですから、夕食後でしょうか。『夜中』が何時かも記されていません。結局、パウロの説教は何時間ものだったのかは分かりません。

しかし、途轍もなく長かったようです。

▼戦後のキリスト教ブームと言われた時代の説教は長かったと聞きます。1時間2時間は普通だったようです。今日で言えば、講演の時間です。だんだん短くなって、今は30分は長い方、何ですか15分がいい加減だと言う人が多いようです。

教会に勢いがあった頃は説教が長く、勢いがない今は短い、これは何かを暗示しているのでしょうか。それとも、あまりに長い説教をしたから、人々が教会を離れたのでしょうか。多分。それはないでしょう。

▼9節。

『エウティコという青年が、窓に腰を掛けていたが、
パウロの話が長々と続いたので、ひどく眠気を催し、

眠りこけて三階から下に落ちてしまった。起こしてみると、もう死んでいた。』

『窓に腰を掛けていた』のは、満席で普通の場所には余地がなかったからでしょう。行儀が悪いという話ではありません。

『パウロの話が長々と続いた』

先程申しましたように、2時間でしょうか、3時間でしょうか。この時代には、語る者も、聞く者も、とにかく一所懸命だったようです。

▼『ひどく眠気を催し』どんなに熱心でも、眠気は別のようです。そうだろうと思います。ゲッセマネの園で眠り込んでしまった弟子たちを、連想させられます。

『眠りこけて三階から下に落ちてしまった』

3階の席にいたということです。どういう作りの建物かは分かりません。とにかく、人がひしめいていました。今日の中国では、同様の光景があると聞きます。見てみたいように思います。

東北の小さな教会、今は礼拝出席一桁というような、建物も小さい教会でも、かつては100人もものが集まっていた。

居心地が良いはずがありません。何もかも不自由だったと思います。しかし、そこには信仰が、信仰の熱心がありました。

ここにこそ、私たちが学ぶべきことが記されていると考えます。

▼『起こしてみると、もう死んでいた』

大変なことになりました。

今日だったら、AED「自動体外式除細動器」の出番でしょうか。

最初に申しましたように、3階から墮ちる人はいないでしょうが。突然の事故死、病死は、充分あり得ることです。私たちの教会の玄関は、かなり危険だと思います。

教会で、礼拝の時に、ことが起こったら、周囲は、特に家族は、それをどう受け止めるか、躓きにならないかという話です。

▼10節。

『パウロは降りて行き、彼の上にかがみ込み、抱きかかえて言った。』

「騒ぐな。まだ生きている。」

9節には、『起こしてみると、もう死んでいた』と記されています。本当はどっちなのでしょう。というような話ではありません。『もう死んでいた』のは事実です。しかし、それを承知でパウロは『騒ぐな。まだ生きている』と言いました。

これは、イエスさまが会堂司の娘を生き返らせた話に通じます。

マルコ福音書5章です。長いので、省略して読みます。

『35～36節。イエスがまだ話しておられるときに、会堂長の家から人々が来て言った。』

「お嬢さんは亡くなりました。もう、先生を煩わすには及ばないでしょう。」

36:イエスはその話をそばで聞いて、「恐れることはない。ただ信じなさい」と会堂長に言われた。

39～40節。家の中に入り、人々に言われた。「なぜ、泣き騒ぐのか。子供は死んだのではない。眠っているのだ。」40:人々はイエスをあざ笑った。

41～42節。そして、子供の手を取って、「タリタ、クム」と言われた。これは、「少女よ、わたしはあなたに言う。起きなさい」という意味である。

42:少女はすぐに起き上がって、歩きだした。もう十二歳になっていたからである。それを見るや、人々は驚きのあまり我を忘れた。』

▼単にストーリーが似通っているという話ではありません。一番肝心なメッセージが重なっています。

『騒ぐな。まだ生きている。』

『恐れることはない。ただ信じなさい。』

『なぜ、泣き騒ぐのか。子供は死んだのではない。眠っているのだ。』
重なるメッセージは、『騒ぐな。恐れることはない。なぜ、泣き騒ぐのか。』です。
そして、当然、このことこそが、今日の聖書箇所の子題なのです。

▼『騒ぐな。恐れることはない。なぜ、泣き騒ぐのか。』
何時でも、何処でも、何が起こってもです。
優しい言葉に言い換えれば、『騒ぐ必要はない。恐れることではない。泣き騒ぐ必要はない。
… 安心していなさい』となります。
これがメッセージです。

▼11節。
『そして、また上に行って、パンを裂いて食べ、
夜明けまで長い間話し続けてから出発した。』
まるで何事もなかったかのような、パウロの振る舞いです。
『パンを裂いて食べ』とは、一休みしてという意味ではありません。
パン裂き、即ち、聖餐式であり、礼拝です。
つまり、何が起こっても礼拝が続けられたということです。
今、この瞬間に地震が起こったら、礼拝中断は余儀なくされますし、誰かが急病になったら、
相応の対応が必要です。それをしないで、礼拝を守り続けなさいということではありません。

▼しかし、例え中断されたとしても、礼拝は守り続けられます。何事もなかったかのように
ではないでしょうが、礼拝は守り続けられます。礼拝を守り続けることにしか、救いはありませ
ん。

▼12節も読みましょう。
『人々は生き返った青年を連れて帰り、大いに慰められた。』
『生き返った』とはっきり記されています。仮死状態だったとかという話ではありません。
ですから、当然、人々は驚き感謝し、そして慰められたでしょう。
しかし、これは一人、『エウティコという青年』の身の上に起こった奇蹟ではありません。
礼拝に集う者全てに語られているメッセージです。

▼或る牧師が、この人は良識も分別もある牧師ですが、私の所に抗議に来ました。教会暦に『永
眠者記念礼拝』とあるのはおかしい、何とかしろと言うのです。彼は、『永眠』がそもそも間違
っていると主張するのです。

私が決めたものではありませんし、変える権限はありません。ですから、『信徒の友』の日課
も、聖書日課も、手帳も、変えることは出来ません。

抗議されても困るのですが、彼の言い分は解らないではありません。

『永眠』という表現で、死という現実を覆い隠してしまったなら、復活も覆い隠されてしま
うでしょう。

『永眠』という言葉で、死を美化してしまったなら、最早復活信仰は必要ないかも知れませ
ん。

▼しかし、『永眠』という言葉は、死を覆い隠しごまかすためのものではありません。むしろ、
明確な復活信仰に立った表現ですし、そうでなければなりません。

今日の出来事は不可解な要素が強く、何故、この出来事が記されているのかと戸惑う気持ち
が残ります。

教会の中でも、礼拝の中でも、信仰深い人の身の上にも、納得のいかないような出来事が起
こる、不幸も免れ得ない、しかし、そこには、依然として復活信仰の希望が残る、だから、何
時でも、何処でも、何が起こっても『騒ぐな。恐れることはない。なぜ、泣き騒ぐのか。』

このメッセージが語られているのではないのでしょうか。

